

8月の10日間

5月、オバマが現職大統領としてはじめて広島を訪れ、被爆者の慰霊碑に献花・黙祷をした。17分間の核廃絶を誓う演説で、彼の名前は人類史に刻まれることだろうと思う。

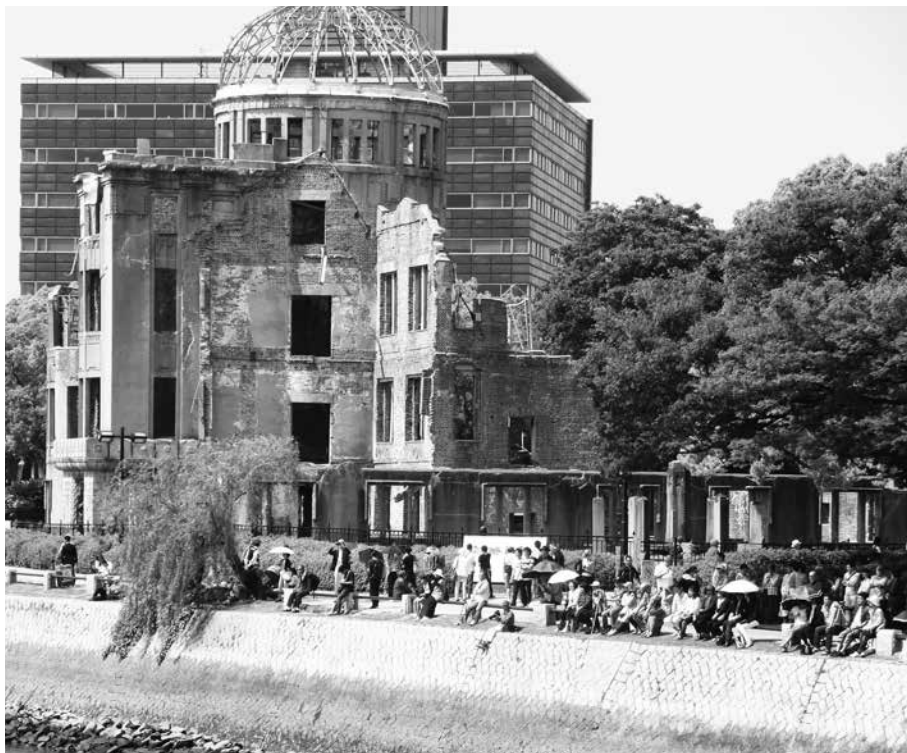
敗戦から10数年後、私は新聞社の社会部記者だった。8月は特別の月だった。6日広島、9日長崎、15日は敗戦記念日。10日間に歴史が凝縮されていた。毎年、取材チームを広島に送り込んで原爆を取材した。

被爆者はなかなか取材に応じてくれなかった。会えても被爆体験を引き出せなかった。ある年の8月、広島から帰阪した夜、7年先輩のWさんから誘われて飲み屋に行った。「ご苦労さん、被爆者はしゃべらんדרう？」Wさんは原爆について詳しくた。驚いた。Wさんは被爆者だったのだ。かれは陸軍経理学校の生徒で、広島の実家は爆心地の旅館だった。7日に戻ってみると、手水の石だけを残してすべては消えていた。学徒動員で広島にいなかった姉だけを残して、家族は全滅していた。

「なぜ被爆者の口は重いのかなあ」とつぶやくと、一言「地獄を見たんだよ」と答えた。それ以上の質問を受け付けない表情だった。Wさんは原爆病だった。社会部長席で倒れ、長い間、腎臓の透析を受けて逝った。

Wさんと重なり忘れられないのが丸山眞男だ。東大助教授から敗戦の年の4月、赤紙で引っ張られ、6日は広島市宇品の陸軍船舶司令部にい

被爆国としての記憶、
その重みを想う夏



戦後71年、広島での平和な光景。オバマ大統領訪問の5月、原爆ドーム脇の川べりでは水辺のコンサートが開かれ、多くの人が吹奏楽の演奏を楽しんでいた

た。爆心地から5キロだったが、奇跡的に助かった。敗戦後、政治思想史の学者として日本の思想界を代表した。丸山は、被爆したことを24年間誰にも明かさなかった。被爆者手帳は生涯申請せず、香典は被爆者組織にと遺言した。「懐かしいですね。僕は行きたいけど、怖くてね。怖いですよ」。広島再訪は32年後だった。丸山も地獄を見たのだ*。

国内、世界各国のオバマ演説に対する反応は予想したとおりだった。「謝罪がなかった」「具体策がなかった」「茶番だ」。昔との違いが1つ。被爆

者が話し始めたことだ。被団協代表がオバマと談笑し、涙をにじませた被爆者の肩をオバマが抱いた。

変わらないのは「関心」の短さだ。かつては10日間で終わった。こんどは3日でオバマ紙面は消えた。世界で唯一の被爆国だったら、大声で核兵器廃絶を叫び続けなければならなかったのに。オバマにくっついて歩き、日米が仲良くなったとくどく語り続ける首相の姿を、辛い気持ちで眺めた。

オバマは地獄をみただろうか。(古野喜政)

*「丸山眞男話文集1」みずず書房、457～499頁

contents

活動フォトニュース	2
学習講師研修会に参加して	3
シリーズ この人に聞く 第6回 井野口慧子さん〈無言の訴えを聞く〉	4
活動紹介 インターン体験	6
活動日誌 (5月～7月)	7